

RJP リコーダーピース

---

ブラウン  
2本のアルトリコーダーのための  
第6組曲

CDの演奏者

長谷川圭子 (リコーダー)

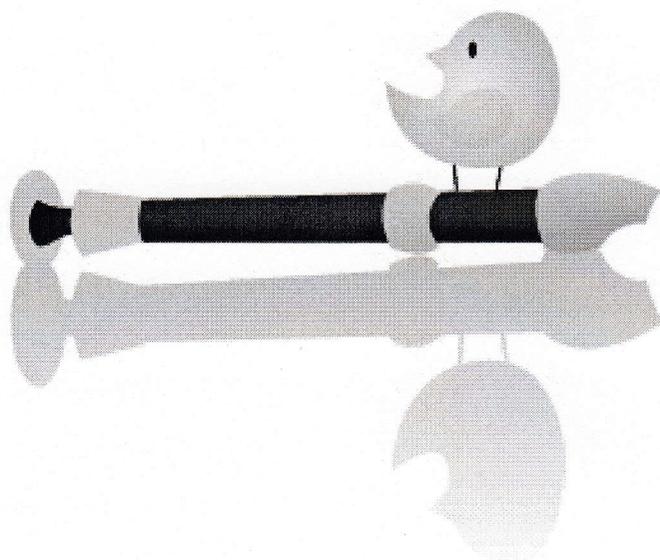
石田誠司 (リコーダー)

J. D. Braun  
**Suite No. 6**  
*for 2 Alto Recorders*

Players on CD

Recorder: Keiko Hasegawa

Recorder: Seiji Ishida



---

RJP Recorder Music Series

## ◆解説◆

前奏曲と5つの短い舞曲から成ります。演奏の難しい箇所がなく、しかも美しくおもしろく書かれていますので、初級～中級のかたにも楽しめるすぐれた作品になっています。初級のかたは、Sarabande → Prélude の順で始め、あとは気に入った曲に進んでください。休符以外のブレス（息つき）箇所をVで示しましたが、必ずしもこれにとらわれる必要はありません。

### — Prélude — 難易度 B2 —

4分の3拍子のプレリュード（前奏曲）です。速めのテンポで演奏しても面白そうですが、ここでは少しゆったりとしたテンポで演奏してみることにしましょう。

2小節などで音符に付されている+の記号は「トリル」で、tr. という記号を略記した t. という記号から来ているのではないかと思われます。初級のかたは、まずこれを無視して練習して、慣れてきてから少しずつところみてください（以下ではトリルに関する解説が多くなってしまふのですが）。

トリルは「1つ上の音との素早い交替を何度か繰り返す」という装飾で、バロック時代の作品では好んで多用されました。また、バロック時代のトリルは、「上の音から開始」が普通で、Recorder II の2小節の場合ならば、当該音符「ラ」よりひとつ上の「シ」の音から開始し、「シラシラシラシラー」ぐらいに演奏します（指づかいについては後述）。このかん途中でタンギングは行わず息を入れ続けながら指づかいだけを変えてください。そして、最後に音符本来の音である「ラ」の音がしばらく聴かれるように時間を配分するのが普通です。また、トリルは「音の交替をしだいに速くする」のが良い感じになることが多いということも、覚えておくといいいでしょう。

さて2小節の場合、Recorder I の「ファ#」のトリルは、「ソ」と「ファ」の速い交替ですから、これは正規指づかいで演奏できます。ところが Recorder II のほうは「シ」と「ラ」の交替ですから、やってみるとわかるように、正規指づかいだけで演奏するのは容易ではありません。そこで、最初は正規指づかいから始めますが、途中から「シ」の音に[01235]という指づかいを用いて、

[012356]→[012345]→[01235]→[012345]→[01235]→[012345]

という順で練習してみてください。[01235]による「シ」は、正しい音程よりもかなり高くなってしまいますが、バロック的な趣味ではトリルの音程が広めになるのは華やかさが好まれますので、かえて良いくらいなのです。

以上の、2小節のトリルは、8小節で、パートが入れ替わって出てきます。

Recorder I の12小節に出てくる「ミ」の小さな音符は「<sup>ぜん だ おん</sup>前打音」といい、ごく短く（つまり速く）演奏することもあります。この場合は3拍目の「レ」の前半の時間をもらって八分音符として演奏してよいでしょう。

Recorder I の15小節に出てくる「ミ」のトリルは、「ファ#」と「ミ」の交替です。これは、「ファ#」に [0]（つまり左手親指だけをふさぐ）という替え指を用いて演奏します。

Recorder II のほうにある「ド#」のトリルは「レ」と「ド#」の交替で「レドレドレドー」ぐらいに演奏します。これは正規指づかいで始めて、途中から「レ」の音に[01256]という指を用い、

[012]→[01245♯]→[01256]→[01245♯]→[01256]→[01245♯]

のように演奏するとよいでしょう。

ところで、この14～15小節は、右図のように、2小節を合わせて「2分の3拍子」の1小節分のように感じられます。



このような現象ないし技法を「ヘミオラ」といい、バロック作品の3拍子の曲にはたいへんよく出てきますので、これを感じながら演奏するようにしてみてください。ほかに31～32小節、38～39小節もヘミオラになっているとみられます。

Recorder II の31小節には「低いファ#」のトリルがあります。慣れないうちはむずかしく感じるかも知れません。右手の甲の位置（角度）をこの音の演奏に合わせて微調整するのがコツです。

## — Muzette — 難易度 B2 —

ミュゼットは元来はバグパイプ型の楽器の名前で、それが舞曲の名前として使われることもありました。ちょっと農民ふうの素朴な味わいです。

リピート記号によって繰り返される楽節が6つ連ねられた形の曲で、このうち最初と最後だけが、内容も同じの4小節楽節、その間には含まれた4つの楽節は8小節ずつになっています。このように、サンドイッチのパンのような具合に置かれて「形をまとめる」役割をする短めの楽節が最初と最後にあり、その間に4種の料理が挟まれているという形式です。

2 fois chaque Couplet. とあるのは、繰り返しの2度目はRecorder I と Recorder II が交替して演奏しなさいという意味だと思いますが、CDの演奏では初級者の練習の便宜を考えて、この処理を行っていません。二人で演奏するときは、ぜひこの「2度目は交替」を実行してみてください。

ところで、フランスでは、18世紀ごろ、ジャズの「スウィング」のようにリズムを不均等に演奏する「イネガル」という奏法が広く行われていたらしいことが、いろいろな古い文献によって、わかっています。そして、このミュゼットなどは、「イネガル奏法で演奏されるのが通例だった曲」の条件（リズム割が比較的単純で、旋律線に順次進行が多く、テンポが極端に速くない、など）に、よく該当します。本書の添付CDではイネガル奏法を採用していませんが、二人で演奏する場合には、いろいろなフランスバロック曲を専門家が演奏したものを参考に、真似してやってみるのも悪くはないでしょう。

## — Sarabande — 難易度 B1 —

サラバンドはゆっくりとしたテンポで奏される3拍子の舞曲です。ゆったりとした動きで、しかも順次進行（音階のように、隣の音に進む進行）がほとんどなので、演奏は難しくありません。（「+」の記号＝トリルについてはプレリュードの解説を参照してください。）後半には八分音符が2つずつセットでスラーをかけられた音形が出てきますので、これを面白く演奏できると良いですね。

## — Rigaudon —

難易度 B3

リゴドンは、ハキハキした感じで演奏される、速いテンポの2拍子系の曲です。第1リゴドンを演奏したあと、続いて第2リゴドンを演奏します。それがすむとまた第1リゴドンに戻って、こんどは繰り返しを省いて演奏します。第1リゴドンの最後の音に「フェルマータ」がつけられているのは、「最終的にここが曲のおしまいの部分になりますよ」という意味で、べつに「2～3倍に長く伸ばす」というものではありません。特に、第2リゴドンに行く前のときに、ここで音を伸ばして待ったりしてはいけません。

第2リゴドンは「ト短調」が基調で、すこし暗い感じになります。「シ♭」や「ミ♭」をめぐる指づかいにはクロスフィンガリングが多くなりますので、やや難しさがあります。初級のかたは、すこし遅いテンポでの練習を根気よく繰り返してください。

## — Paysane —

難易度 B3

ペイズァヌは田舎とか農民とかいう意味のようですので、農民ふうの素朴な踊りなのでしょう。リズムカルに演奏したいものです。

Recorder II の10小節に出てくる「ド♯→シ→ド♯→レ」という進行は、クロスフィンガリングが含まれていて、少し難しいですから、ゆっくりと何度も繰り返し練習してください。

## — Menuet —

難易度 B2

メヌエットは三拍子の舞曲です。第1メヌエットに続いて第2メヌエットを演奏し、また第1メヌエットに戻る（ただしこのときは繰り返しを省く）という、通常の形式によっています。

デュエット作品にしては、ここまで「かけあい」の要素はあまり多くなかったのですが、このメヌエットに至って、かけあいや同度カノンの技法が多く使われています。

解説は以上です。作品2に属する1～6番の組曲を通してみると、やさしい曲から始まり、5番や、本書の6番あたりでは少し音楽が複雑さを増して、内容的にもいっそう力がこもっているのがわかります。平易な曲集ですが、上級者でも、ときどき取り出してはちょっと演奏してみるには好適の、佳品ぞろいだと言い得るでしょう。

ぜひ末永く楽しんでいただけましたら幸いです。